

意外に多い夏場の心臓発作

心臓の筋肉に栄養を供給する冠動脈。その冠動脈の血の流れが滞ったり・停止したりして生じる狭心症や心筋梗塞といった病気は生命に直結する大病です。

寒い時は血管が縮こまり発作が起こりやすくなるので、冬場に心筋梗塞が多いことは良く知られていますが、夏場にも多いことをご存知でしょうか。

心筋梗塞とは冠動脈内に粥腫(じゅくしゅ、別名プラーク)と呼ばれる脂の塊が形成され、粥腫が何らかの原因(過労・ストレス・寒冷暴露・喫煙など)で割れてしまうことからその場所に血の塊(血栓)が付着して血流を障害することが原因とされています。

夏場は高温から脱水になりやすく、血液粘調度(ドロドロぐあい)が増して血栓を作りやすい傾向にありますので、脱水が引き金になり心筋梗塞を引き起こしてしまうのです。

いったん血栓が出来ると、脱水状態が根本にあるので血栓の量が多くなったり・血圧の低下を来しやすくなったりして、夏場の心筋梗塞は重症化しやすいと指摘する専門家もいます。

特に注意していただきたいのは、既にステントやバイパス手術など冠動脈の治療をお受けになった患者さんです。

普段から抗血小板剤という血液をサラサラにする薬剤を飲まれていると思いますが、健常者よりは冠動脈に血栓を形成しやすい状況にありますので、より一層の配慮が必要でしょう。

さらに、脱水に陥りやすいご高齢の方や糖尿病・脂質異常をお持ちの方も注意が必要です。

若年の方でも、屋外や酷暑下の状況で仕事やスポーツをされる方に心筋梗塞が発症してしまうことは間々あります。



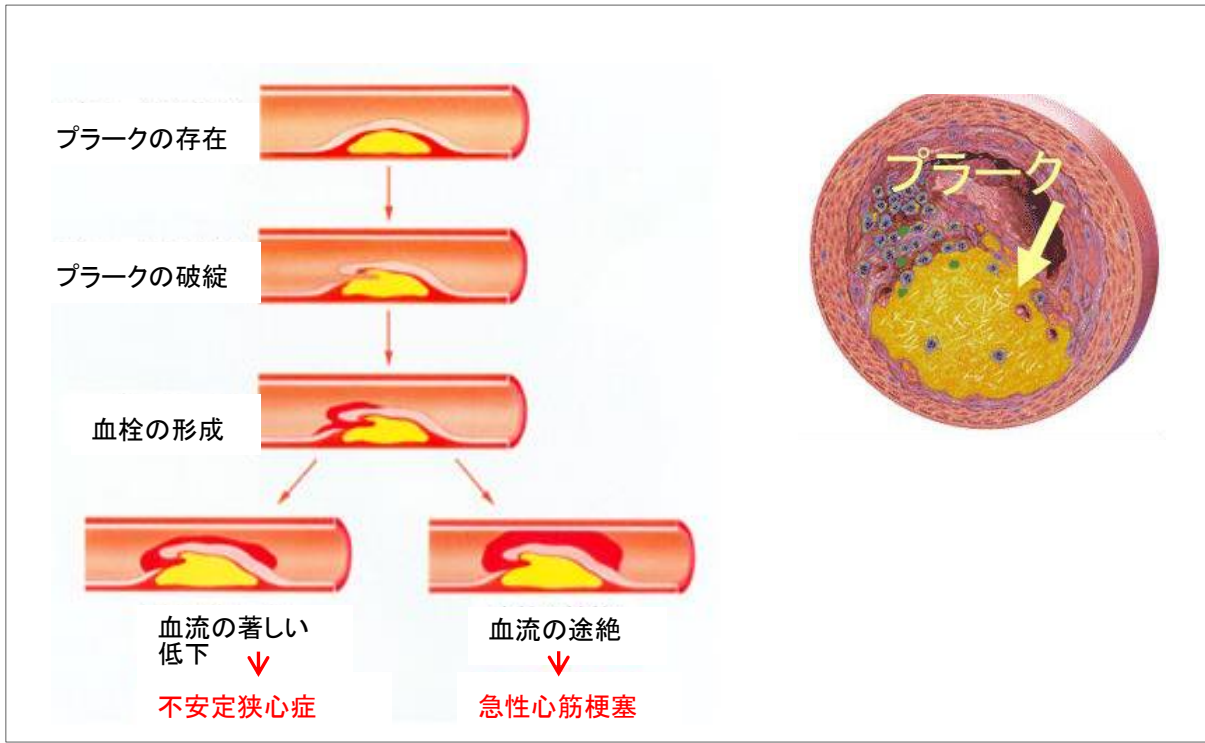
予防のためには、まずは脱水に注意し水分をこまめにとることです。熱中症の予防にも通じますが、のどの渇きを感じるより先に少しずつでも水分補給を行いましょ。ご高齢の方などは、酷暑時はなるべく外出を控え、朝夕の比較的涼しい時間帯に外出するように心がけましょ。

常用薬をお持ちの方はご旅行先や外出先にも携行頂き、薬の服用が途切れないように注意してください。

心筋梗塞はいったん発症してしまうと、高率・短時間で命を落とす危険のある非常に怖い病気です。また、発症してから治療(血栓による血流のうっ滞が解除されるまで)までの時間を短くすることが生命の維持や後遺症の軽減に大切であるとわかっています。

胸や背中 of 突然の痛みや圧迫感・呼吸困難などが主な症状ですが、のどや肩の痛み・腹痛や気分不快などが症状のこともあります。特にご高齢の方や糖尿病をお持ちの方は症状が出にくかったり・軽く出る場合がありますので注意が必要です。

おかしいな、と思ったら我慢せずに最寄りの医療機関を訪れてください。



【循環器科診療部長 村岡 理人】

